

「秋田に育まれた

我が東洋経済新報社」

東洋経済新報社 代表取締役社長 駒橋憲一 (昭和50卒)

弊社は昨年、創業125周年を迎えました。実は125年前に創業したのが、秋田中学出身の町田忠治です。当時はまだ「太平洋学校変則中学科」という名前でした。卒業後、県の留学生に選ばれて東京大学予備門に入学します。東大予備門は後の第一高等学校、いわゆる一高です。しかし、途中で脚氣を患って秋田に戻ります。

ちょうどそのころ、犬養毅が秋田にいました。犬養は自由民権運動家から政治家になり、首相だった515事件のときに殺されますが、当時は官憲の追求を逃れて秋田に来ていました。犬養は当時の「秋田日報」、今の秋田魁新報ですね、ここで言論を展開してました。

また地元の青年向けの塾を開いてまして、町田はそこで世話係をつとめていました。この犬養との縁が、のちのち町田の人脈の広がりにつながっていきます。

町田は病氣も癒えて東京大学法学部撰科に進み、1887(明治20)年に修了します。その後、犬養の伝手で「朝野新聞」や「郵便報知新聞」(今の報

知新聞の前身の前身)で政論記者として活躍します。町田は外遊を希望し、

1893(明治26)年に横浜を出航、アメリカ、ヨーロッパに渡ります。特にロンドンに長く滞在しまして、その時注目したのが「エコノミスト」や「スタチスト」という経済雑誌です。これがイギリスの経済界に大きな影響力があることを知り、日本でも同じような経済誌が必要だと思に至ります。

1年ほどの外遊から「報知新聞」に戻ったものの、経営悪化で政治経済分野から遠ざかり、世俗的な新聞になったため、町田は退社します。そして、いよいよ本格的な経済誌の創刊に向けて活動を始めます。しかし、先輩や友人に相談すると、ほとんど反対されました。経済誌なんて、そんな売れる物じゃない、ということ。渋澤栄一にも相談したら、当初反対したようですが、町田の熱心さにほだされたのか、最終的には数百部は買い上げて、知り合いに配布してくれる約束をもらいました。そのほか、三菱財閥や銀行からも広告を出してもらう形で支援を得ています。ただ、元手となる金銭の支援

者は誰なのか、町田は最後まで明言しませんでした。が、どうやら当時の日本銀行の川田総裁だと言われています。

そういうことで、1895(明治28)年の11月、日清戦争が終わった年に、「東洋経済新報」が創刊されました。町田はまだ32歳という若さです。ここまでこぎ着けたのも、町田の強い信念、計画性の表れだと思えます。同時に、渋澤栄一や日銀総裁といった有力な経済人と、かなりの人脈を築いていたという点にも驚かされます。



講演する駒橋憲一さん

しかし、町田は1年ほどで会社を離れ、日本銀行に入ります。さらに大阪の山口銀行(後の三和銀行)を経営し、1912(明治45)年には秋田選挙区から衆議院議員に当選。その後、農林大臣や商工大臣を務めました。そして昭和10年に民政党総裁となり、時代が時代なら初の秋田出身の首相になっていたことでしょう。

次に石橋湛山の登場です。湛山が東洋経済に入社したのが明治44年、27歳の時です。そして40歳で主幹兼専務、つまり会社のトップについています。このころには株式会社になつていましたが、今みたいに経営と編集とが分離しておらず、言論のトップが経営の責任をもつ、ということ。「社長」ではなく、町田以来ずっと「主幹」と称していました。

昭和期に入ると経済状況はますます厳しくなり、軍国主義が高まります。戦局はどんどん悪化し、東京も空襲に襲われるようになります。いよいよ東京は危ないとなった昭和20年3月、石橋湛山は秋田の横手に疎開することを決定します。当時は平鹿郡横手町です。横手でお世話になったのが、出羽日報社です。出羽日報社は1894年に「横手商業新聞」を創刊しており、その後「羽後日報」となり、県内で秋田魁新報に次ぐポジションにあつたようです。社長の石川豊治さんは、昭和19年末に東京に来られた際、弊社を訪ねら

れ、湛山から適当な疎開先の印刷工場を探しているがどうかと言われ、石川さんが譲渡を申し出たといっています。

4月末には印刷体制が整い、5/5号から実際の印刷を始めました。ただ、印刷用の資材や薬品が手に入らず、かなり苦勞しながらの工場運営だったようです。横手には、中島飛行機の工場があったためか、7月15日の湛山の日記には「敵艦上機が十数機やってきて、爆撃および機銃掃射」があったこと、そして8月5日には横手駅が空襲に遭い、6人が即死したと、書かれています。また、8月14日の深夜に土崎が空襲されますが、その際、B29は日本海沿いに秋田まで来て、爆弾を落とした後、横手上空を通過して帰って行ったと書いています。湛山は、日本の降伏をもう知っていました、それなのに何のために空襲するのか、本当に明日、終戦発表になるのかと、不安を感じたといっています。

10月22日には最終的に家族とともに横手を去りました。これから、戦後の石橋湛山の政治家としての話になります。湛山にはいろんな政党から声がかかりますが、自由党から出馬します。しかし、所詮は政治の素人で最初の選挙は落選しました。

湛山は落選しましたが、吉田茂内閣の大蔵大臣となり、ケインズの積極的な財政政策を進めます。これに対してGHQはインフレを恐れて、デフレ

政策を進めようとしていました。翌年の選挙では当選したものの、経済政策の方針や進駐軍の経費負担問題、つまり将校の宿舎の電気代とか、ゴルフ場建設費まで、政府に請求してくる問題に對し、湛山が厳しく対応したため、GHQと対立し、公職追放にあつてしまっています。

この公職追放の情報をつかんだ湛山は当然、何を馬鹿なことを言っているんだ、俺を誰だと思っているというところで、吉田総理に確認に行きました。そして吉田は外務省の担当者を電話で呼び出し、湛山の前で「どうして情報もれたんだ」といって叱責しました。普通であれば、それは本当とか、何とかしろ、というはずのところ、湛山に對しても「飼犬に手を噛まれたと思つてがまんしてくれ」と言つたそうです。さすがにこれに湛山は怒り、その後も吉田茂に對する不信感はずっと続きました。

朝鮮戦争によってGHQの姿勢も変わり、湛山も追放解除となり、政界に復帰し、保守合同のあと、昭和31年12月の自由民主党総裁選に打つて出ます。反共保守派の筆頭・岸信介との決選投票で、わずか7票差で第二代総裁に選ばれます。そして鳩山一郎内閣の後、石橋内閣が発足します。湛山は72歳になっていました。この総裁選活動を主導したのが、秋田選出の石田博英議員で、石橋内閣の官房長官に就任し

ています。

それから湛山は精力的に全国を演説して回りまして、翌32年の1月23日には母校の早稲田大学で、初の私学出身総理大臣ということもあって、就任祝賀会がありました。その日はかなり寒かつたようで、屋外なのにコートも着ずに参加したため、湛山は翌日、急性肺炎で倒れ、さらに2カ月の療養が必要との診断が下ると、「予算審議に出席できず、首相としての責務を全うできない」として自ら辞任します。首相在任期間は、わずか65日でした。

その後、岸信介が首相になり、日米安保条約の改定に走ります。そして60年安保事件が起こるわけですが、もし、石橋政権が2、3年、続いていたら、60年安保はありませんでした。湛山は、岸信介とちがつて、対米従属による反共路線ではなく、日中米ソ平和同盟のような安全保障体制、あるいはヨーロッパのNATOのアジア版のようなことを考えていました。東西冷戦の真つ只中で、実際には逆にアメリカに警戒されて、思うようにできなかったかもしれないにしても、戦後の歴史は違ったものになり、今の日本もまた別の姿になつていたかもしれません。

最後に、早稲田での祝賀会が湛山の発病のきっかけになつたわけですが、実は、この話を秋高の恩師で、倫社や政経を習つた、谷村長男先生の授業で

聞いたことがあります。谷村先生は、湛山と同じく早稲田の哲学科で学んでおり、ちょうど学生の時、まさに湛山の祝賀会の場にいたそうです。すごく寒い日で、その後すぐ総理をやめて、残念だったという話だったと思います。

そのことを入社してしばらくしてから、ハツと思ひ出しました。どういふ文脈で、先生がその話をしたのか覚えていませんが、時期を考えると、ちょうど湛山がなくなつたのが1973年、私が高2の4月になるので、たぶん谷村先生は、そのニュースをネタに、昔の思い出と、こんなすごい人がいたということを話されたのだと思います。

これもまた、私にとって、秋田と我が社を結ぶ、ご縁の一つであります。

Profile



こまはし・けんいち／1957年秋田市生まれ。北海道大学法学部卒。1980年株式会社東洋経済新報社入社。1997年「会社四季報」編集長。2007年取締役第二編集局長。2012年常務取締役データ事業局長。2017年12月より代表取締役社長。